

13 世紀ドイツ・ゴシック彫刻の「眼差し」と視覚的効果 — 祈念像のイメージの起源をめぐる新たな考察から —

仲間 絢（京都大学）

エルヴィン・パノフスキーの *Perspective as Symbolic Form* (1927) 以来、「祈念像 (Andachtsbild)」は、主に 14 世紀以降、修道院や私的礼拝において、瞑想体験高揚の媒体・手段として特有のイメージ効果をもつと定義され、12 世紀中葉から 14 世紀中葉にかけての主要なメディウムである聖堂彫刻とは別に分析される傾向にあった。しかしながら、祈念像の鑑賞法の特性とされる、彫像との内的対話や直接的な眼差しの交換による観者の感情の喚起は、中世彫刻一般に通じる根本的なイメージ効果である。たとえば、ハンス・ベルティングやブルーノ・ベルナーは、ピエタ像や苦難のキリスト像について、中世彫刻における公的・私的礼拝のイメージの相互浸透を指摘している。

ゴシック期の美術は、マイケル・カミーユが指摘するように、イメージが眼差しを介して眼から入り、心臓に到達するというイメージの道程を、人間が世界を認識する根本的形態とみなす当時の光学理論と結び付いている。「愛の矢」『マネッセ写本』(1300 年頃) や「愛の傷」『ロスチャイルド雅歌』(1300 年頃) は、こうした特有の視覚性に基づく代表的な表現である。この視覚性は、聖母図像や神秘主義の中心原典の一つである旧約聖書の「雅歌」を典拠とする。

また、13 世紀特有のイメージに、眼と眼差しに重点が置かれた当時の宗教性が確認される。キリストとの顔と顔との対峙と幻視による直接的な対話、イコニック要素と視覚的体験を強調する傾向は、第 4 回ラテラノ公会議 (1215 年) 以降の聖体概念とキリストの人間性・身体性への憧憬を背景とし、すでに 13 世紀にその萌芽が認められ、後期中世のイメージにおいて、広く本質的契機となったのである。

本発表では、眼差しの効果が顕著でありながら、先行研究ではこの観点から分析されていないバンベルク大聖堂工房と、その後継工房が 13 世紀に制作したバンベルク大聖堂、ナウムブルク大聖堂、マイセン大聖堂の彫像群を考察対象とし、実証を試みる。その際、具体的には、バンベルク大聖堂の障壁レリーフ (1225 年頃) の預言者の顔と顔の対峙、ナウムブルク大聖堂の障壁と内陣内の寄進者群像のプログラム (1243-49 年) に見るキリスト像、聖母像、ヨハネ像から寄進者群像へ導く視線誘導、また、マイセン大聖堂のオットー 1 世皇帝夫婦像 (1250 年頃) の直接的な眼差しの交換による「愛の矢」の体現を指摘する。このような眼差しを介し、強調された視覚的効果は、祈念像と共通する。したがって、祈念像のイメージ形成の起源において、聖堂彫刻と相互に浸透し合い、視覚的効果が聖堂彫刻においても、重要な役割を果たしたと考えられるのである。